

ロシア／ソ連の日本論

—— その多様性と共通性をめぐって ——

サンドロヴィッチ・ティムール

はじめに

現代社会は、複数の文化が絶えず接触し混淆する多文化化が進行する社会であることは、誰もが認める事実であろう。しかしながら、そのような現代社会だからこそ、一步後ろに下がって、ある国の文化・社会に対して、他の国ではどのような見方が主流であったのかということをしつくり見るのは大変重要な作業であると思われる。「考察の対象」となる国と「考察を行う」立場にある国が隣国同士であれば、そのような作業は一層必要となるであろう。また、「考察をする立場」にある国に、ある種のイデオロギー的な要素が混ざっていれば、それらの要素も考慮に入れる必要が出てくる。

本稿は、ロシアやソ連で書かれた「日本論」の文献を対象に、その特徴や歴史的な背景や時代、そこから見えてくる「ロシア・ソ連型日本観」パラダイムの特徴に関して考察することを目的とする。

いわゆる「日本論」⁽¹⁾の分野は、社会学・文化人類学の研究領域において現在独立したものとして扱われていると言っても、過言ではない。1978年の野村総合研究所の調査結果によると、「日本論」という分野に分類できる文献が1946年から1978までの間に698冊も出版されている。そして、その698冊のうち58%が1970年以降、また25%が1976年から1978年の3年間に出版されたことから、「日本論」が占める立場の重要性は明らかになるであろう。「日本論」の領域において、いったいなぜその膨大な数の文献が著されたのか、筆者なりに説明しておこう。

江戸時代に鎖国していた日本国、その社会、国民、習慣に対して、欧米では大変好奇心めいた目が向けられていた。19世紀後半の「日本論」には、まずそのような「珍しいもの

⁽¹⁾「日本文化論」、「日本人論」もしくは「日本社会論」というような呼称の仕方もあるが、本稿では統一して「日本論」と呼ぶことにする。

としての」日本へのまなざしが窺える。そんなこともあって、日本の国民も自ら、「われわれは他の国の国民とどのように異なるのか？」ということが気になりはじめたのではないかと想像される。換言すれば、「日本論」の根本には「外から内へ向けられた好奇心」と、その外の好奇心に対して「内から外へ向けられた好奇心」が働くことが言える。

さて、本稿においてロシアおよびソ連の日本論をとりあげる意義とは何か、イデオロギー的な背景の特殊性を説明しながら論じたい。従来、「異文化を書く」行為に際して「書く側」に存在する何かのイデオロギーや偏見は否定的なものとして捉えられていることが多かったのである。しかしながら、ソ連の社会全体を貫く共産主義のイデオロギーの存在は、場合によって日本論を著すのに積極的な役割を果たしていたのではないだろうか。

ソ連の歴史（そして、文化的な側面も）はずっと変らないままの一枚岩的なものではなく、波のように「固まっている」時期と「氾濫する」（自由な）時期とがあったと言っても過言ではない。よって、ソ連で生まれ育った人間の創造的な活動の成果である芸術作品や文学作品、そして研究成果も何かの形でその二つの時期の相違を反映しているに違いない。

筆者の母国、ウクライナの例を見ることにする。当時まだウクライナではなくソ連の中のウクライナ共和国と呼ばれていたこの国では、スターリンが亡くなりフルシチョフが書記長になって間もなく、文化的なルネサンスが始まったことは、周知の事実である。「社会主義リアリズム」と内容的にかなり距離をおいた美術作品が次々と作られ、映画の分野では「詩のような映画」というものが現れた。その時期のウクライナの映画は多くの国際フェスティバルでも数多くの賞を獲得している。

したがって、ソ連に存在したある種のイデオロギーの強弱に伴って、日本論の著作においてもそれが反映されていたのではないだろうか。換言すれば、イデオロギーの強弱によって日本の描き方も異なっていたのではないだろうか。そして、それによって欧米の日本論ではなかなか論じられてこなかった側面がソ連の日本論においてたびたび論じられていたのではないだろうか。イデオロギーの強弱によるソ連における日本論の特徴的なところ、そしてそこに見えてくる隣国の日本社会、日本人のイメージに焦点を当てながら、ソ連における日本論の変容を考察していきたい。

非東洋社会からの東洋社会研究ということになると、E. サイドの『オリエンタリズム』に注目せざるをえない。ロシア・ソ連の日本観、東洋観についても、ある種の「オリエンタリズム」という視点が見出せる。ここで、ロシア・ソ連のオリエンタリズムについての先行研究を整理しておこう。

ロシア（ソ連）型オリエンタリズムに関しては、今までいくつかの研究が出されている（Sahni 2006, Schimmelpenninck van der Oye 2010, Brower and Lazzerini eds. 1997）。

以下、それぞれの著作の内容を考察する。

Kalpana Sahni は自らの著作において、そのサブタイトル、“Russian Orientalism and the Colonization of Caucasus and Central Asia” から分かるように、ロシア、そして後継のソビエト連邦におけるオリエンタリズム（的な思想）の誕生や発展を、数多くの例をあげながら跡付けている。本著作は大きく分けて2部からの構成となっている。第1部において、ロシア帝国におけるオリエンタリズムの誕生やその特徴、ヨーロッパの思想との関連性、思想家たちのオリエントに対する立場、ロシアのオリエントに当たる地域におけるツァーリの政策等が論じられる。そして、第2部において、主に20世紀のソ連における少数民族に対する共産党実行委員会の政策に焦点が当てられる。

筆者の考えでは、本著作の一番大きな特徴は、西洋から「東洋」（つまり、オリエント）として位置づけられるロシアにおいて、ロシアにとってさらに東洋に当たるカフカスや中央アジアの国々に対してどのような議論が行われ、どのような政策が取られ、どのような言説が構築されていたのかが、理論の対象になることにある。つまり、西洋の距離的に遠く離れた植民地に対してのオリエンタリズムとは違う種の、「東洋」の国による東洋に対する見方が論じられる点である。

Schimmelpenninck van der Oye の著作には、ロシア帝国における東洋学の誕生や発展、そして時間の流れとともにロシア人にとってのアジアのイメージがいかに変貌したのかということが詳しく論じられる。彼の主張の一つは、ロシアにとってのアジアの位置づけは、ロシアの西洋に対する立場・見方、それからロシア人のアイデンティティの形成のプロセスにも深く関わっている大変重要な作業であったということである。Schimmelpenninck van der Oye は前述のように、ロシアの地理的な位置の両義性がアジアに対するイメージの形成と深く関連していると指摘する。

Daniel R. Brower や Edward J. Lazzerini が編集した著作、“Russia's Orient Imperial Borderlands and People, 1700-1917” において、ソ連におけるオリエンタリズム的な議論は論じられていない。むしろ、その著作を構成する14のエッセイは、ロシア帝国の歴史の研究の枠組みを拡大し、ロシア人が自分の文化圏とまったく異なる文化圏の人々と出会う際の民族的、社会的、文化的な側面が詳細に論じられる。本著作の主な特徴は、ロシア帝国におけるオリエンタリズムの理論的な基盤が第1部で論じられただけでなく、第2部においてロシアによって植民地化された地域におけるロシアに関する議論や理論が紹介されていることである。

また、上記の3冊に共通するのは、ロシア帝国におけるオリエンタリズムとは、「植民地化する－植民地化される」というある種の権力関係として成り立ち、その権力関係を常

に考慮に入れながら議論を展開しなければならないという視点である。

以上見てきたとおり、ロシア（ソ連）型オリエンタリズムに関する研究の多くは、ロシアが攻撃の対象とし、後ほどロシアの領土の一部になった中央アジアやカフカス周辺の国々を対象にしたものである。それに対して、ロシアの極東の隣国、中国、日本などに対してなされた研究は稀である。また、多くは、1960年代以前の東洋を中心に著わされたものである。

本稿では、これまでのロシア／ソ連のオリエンタリズム論が十分に考察してこなかった「日本」を対象にしたオリエンタリズムについて、主に1960年代以後を中心に考察する。本稿の構成を簡単に述べておこう。まず第1節の研究背景では、ロシアおよびソ連の日本論の系譜、そして、その質的・イデオロギー的な要素の特徴にふれる。続く第2節では、幕末からボルシェヴィキ革命までの「日本論」に焦点を当てることで、幕末～明治時代の日本社会に対してロシア人が抱いていたイメージを分析する。第3節では、ソ連時代の日本論の代表的な文献をとりあげ、イデオロギー的な制約が存在していた社会において作成された文献に注目することで、ソ連の日本論の多様性を述べながらその共通性を確認したい。第4節では、ロシアとその後のソ連において、日本論はどのように変化していったのかに関して考察を行う。具体的には、ソ連期の独特な状況があったからこそ誕生した統合的な文化の解釈の方法、ソ連の日本論に特有の多様性とそれ全体を貫く共通性、そして、日本との交流が始まった時からソ連が崩壊したころまで、ずっと日本に対して大変親和的なイメージを抱き続けたロシア人のことにふれる。さらに、1960年代以後のソ連の日本観の特徴を、オリエンタリズムとの対比で述べる。最後の「おわりに」では、『オリエンタリズム』に対する議論を展開する。

1 研究背景：ロシア・ソ連の日本論の背景

ロシアやソ連の日本論の概要、そして具体的な文献の特徴の考察に入る前に、先行研究および文献索引に基づいて日本論の系譜、さらに先行研究および筆者が行ったインタビューに基づいた、ソ連の日本論の二つの大きな特徴、すなわち、質的な特徴とイデオロギー的な特徴に関して説明を行う。

まず、ロシアおよびソ連の日本論の系譜に関して簡単に述べておきたい。

1-1 ロシアおよびソ連における日本論の系譜：ロシア（ソ連）における日本論文献目録データ

表1は、ロシア（ソ連）における日本論文献をまとめたものである。

表1 ロシアおよび1970年代までのソ連時代の日本論

分野	1734~1917	1917~1958	1959~1973
全体・文献関連。1. 全体、参考書	166	73	49
全体・文献関連。2. 文献索引、一覧、レビュー	12	56	17
全体・文献関連。3. 計測・重量システム、年表*	8	27	-
地理学・民俗学。1. 全体	31	22	-
地理学・民俗学。2. 自然地理学、経済地理学	136	35+24=59	57+24=81
地理学・民俗学。3. 人類学、人口（学）	124	14**	12**
地理学・民俗学。4. 民俗学、日常生活と習慣	313	15***	44***
地理学・民俗学。5. 旅行日記、感想記	180	107	172
計	970	373	375

*1917~1958年には「方法論、プログラム」 **人口学のみ ***民俗学のみ

(Bibliography of Japan. Literature published in Russia from 1734 to 1917 years, Bibliography of Japan. Literature published in Soviet Union in Russian from 1917 to 1958 years, Bibliography of Japan. Literature published in Soviet Union from 1959 to 1973 years をもとに作成)

この表は、ソ連時代に出版された以下の3冊の文献索引を元に作成したものである。すなわち、Bibliography of Japan. Literature published in Russia from 1734 to 1917 years, Bibliography of Japan. Literature published in Soviet Union in Russian from 1917 to 1958 years, Bibliography of Japan. Literature published in Soviet Union from 1959 to 1973 years という文献である。これらは、ロシアと日本の交流が始まったとされる1734年から1917までのロシア帝国の時期、ボルシェヴィキ革命がおきた1917年から1958年の時期、1959年から1973年までの時期における日本論の文献が分野別にまとめられたものである。筆者が、それらの文献索引の3冊から、日本論に一番近いと思われる分野のものを抽出して、分野別にまとめたものである。厳密に言えば、その文献索引の3冊の対象とされている著作は、ロシア人によってロシア語で書かれた単著・編集著には限定されていない。そのような著作以外にも、さらに次のような特徴を持つものも索引の中に入っている。

索引に記載された文献は、日本に関して著されたものだけではなく、他のアジアの国々、もしくはアジア全体に関して著された文献も数多く収録される。その際、日本に関する記述があるところはページ番号で表示される。さらに、文献索引中の文献は、ロシア語で著されたものに限定されていない。それ以外にも、英語、フランス語などの外国語からロシア語に翻訳されたものも含まれている。また、もう一つの大きな特徴として、日本に関し

て書かれた著作に対する書評記事および東洋学関連の雑誌に掲載された記事も索引の中に入っていることがあげられる。

ご覧のとおり、日本とロシアの関係がおおむね成立した1734年からソビエト連邦という国家ができた1917年までの183年の間に、日本論関連の著作が970冊も著されている。その中で一番多かったのは、「民族学、日常生活と習慣」の313件と「旅行日記、感想記」の180件である。

ソ連が成立した1917年から1958年までの41年の間に、日本論関連の著作は373冊著されている。前冊と比較してやや分類の仕方が変わってきたものの、その中で首位をしめるのは「旅行日記、感想記」という分野の107項目である。そして、1959年～1973年の14年間になると、日本論関連の著作が375冊著されている。

さらに、表には示さなかったが、文献索引の2冊目から「日本共産党、日本におけるマルクス・エンゲルス・レーニン研究および日本社会の共産主義的な部分についての指摘」に関する文献も掲載されるようになった。その数は、1917年～1958年の間には296冊で、1959年～1973年には152冊となっている。つまり、日本という資本主義国家がいかに先進的なイデオロギーとしての共産主義に魅了され、それに関連する研究がいかに多くなされているのかということがソ連における日本論の一部をしめていたことが指摘できる。なお、1973年以降の文献索引を手に入れることはできなかった。

この表から分かるのは、ソ連時代に作成される日本論に関する文献の数は徐々に増えていることである。2列目と3列目の数字は一見少ししか変わらないように見えるかもしれないが、それはそれぞれ41年と14年の間に著された著書の数だということを考慮に入れば、納得が得られよう。

上記のように、このデータからはソ連において日本論がいかに盛んであったかがうかがえるであろう。以上、ロシアやソ連における日本論に関する研究の様子を考察してきた。そのような研究に関する事柄は従来の日本論の枠組みから外される傾向にあるが、確認してきたように、ロシア帝国でもソ連でも膨大な数の日本論の研究がさまざまな分野で行われていた。

また、『知日家人名辞典』に収録されている世界の知日家のリストから、1980年代の時点で世界全体で行われていた日本研究の中での、ソ連研究者が占める割合を計算できる。この著作に掲載された研究者・政治関係者・ジャーナリストなどの数は1009名であり、そのうち99名(9.8%)がソ連の知日家である。その内訳は研究者が91名、ジャーナリストが3名、「他」という範疇に入る人が1名で、4名が「政」範疇、つまり、政治関係者(主に外交官等)に属する。この数字からも、旧ソ連では、日本・日本人・日本社会の研究が

活発に行われていたことが確認できる。

1-2 寺川、メシチェリャコフによる戦前から1960年代までの日本論の質的な特徴

まず、国家としてのソ連の50年間の日本論の主な特徴を見てみよう。戦前から1960年代初頭のソ連における日本研究に関しては、『全ヨーロッパの日本学研究とソヴィエトの日本語研究』の著者、寺川喜四男が詳しい。彼はいわゆる自由諸国と共産諸国との間に、日本研究という点に関しては、大きな違いが見られると記す。それは、東欧諸国すなわち共産諸国で行われる日本研究のほとんどが「現代日本学（近代も含む）」の研究であるのに対し、自由諸国における「日本学」は「古典日本学」の研究が主流である（寺川1964）。そのような違いを説明できる要因として、寺川は「両者のイデオロギーの違い」、つまり、共産諸国の学者が一般に立脚した「唯物主義」の立場とイデオロギーに依拠しない自由諸国の立場とをあげている。

そして、上記のイデオロギーが影響を与えるのは、「時代的な特徴」だけでなく、研究分野そのものでもある。東欧諸国では、「日本宗教学」や「日本精神」、「哲学的研究」が皆無な一方、通常「社会科学」と言われる方面の「日本学研究」が盛んである。しかし、その研究の大きな特徴として、綾部（1992: 18）の言葉を借りれば、ホーリスティック（全体観的）な立場に基づいた研究分野、つまり、「日本論」がなかった点があげられる。研究分野としてあったのは、「日本経済」の研究分野や「日本経済史」の研究分野、「日本政治」の研究分野などのそれぞれ独立した分野である。だがその点は、前節の表からも分かるように、1960年代の後半から変化し始めたのである。

もう一つの寺川の興味深い指摘は、共産諸国では「社会科学的日本学」の研究、すなわち政治・経済・社会などに関する日本研究が驚くほど多いことである。彼はその原因を東西学者の「主義」や「立場」や「考え方」に見るものの、そのような要因を考慮に入れても、戦後の共産諸国で行われていた「日本学研究」の拠点が自由諸国のその数をはるかに上回ることは印象的である。

この最後の点は、ロシア人の言語学者・翻訳家であるA. メシチェリャコフも指摘する点で、彼は1960-1970年代のソ連における日本学をモスクワとサンクト・ペテルブルグの二つの「学派」に分け、モスクワの大学で行われていた「現代日本社会の政治および経済」に関する研究が、古代日本の文学などの研究が行われていたサンクト・ペテルブルグを基点としていた研究者に批判されていた点を例としてあげている（Mechtcheriakov 2000: 29）。さらに、当時のそのような「日本学」からは、日本社会に関する正確な情報を得ることがすこぶる難しかった一方、ソ連の公式なイデオロギーに関する情報がかなり得やす

かった点も指摘される。

1-3 日本論の研究者とイデオロギー的な要素との関係という特徴

しかしながら、ソ連が国家としてできた時から、さまざまな芸術の形態において社会主義リアリズムに基づいた、「真の」イメージを築くことが求められていた。文学や科学もその影響を受けたに違いない。研究者もしくは作家は時には、自らが伝えたいと思うことを読者たちに伝えるのに、命をかけることがあった。例えば、日本研究に関して言うと、以下のような二つのエピソードが印象的である。

第一に、前述の木村からの引用だが、ソ連において日本研究の創始者であったコンラドは論文の一つに次のように書いている。「共産党との思想的一致がなければ自分の仕事は考えられない」（木村 1984: 129）、また、「現に前記のエリセーエフは亡命を余儀なくされ、後述するネフスキーは、スターリン時代に日本のスパイだと思われ、粛清されている。コンラド自身は多くを語らないが、やはり三年間の収容所生活を送ったと言われる。彼がさりげなく日ソ間の明るい空を希求したのは、思い付きのレトリックなどではない。体験からにじみ出た叫びであったろう」（木村 1984: 134）。そして、Y. Mikhailova (2010) も指摘するように、19 世紀後半～20 世紀初頭の著名な日本論の研究者、D. Pozdneev も 1937 年に粛清されている。ソ連において創作的な活動を続けることが、いかに命に関わるシチュエーションを多く伴っていたのかを裏付ける大切な指摘である。

この点はおそらく一般の日本の読者たちにとってやや分かりづらいと想像されるが、（特にスターリン期の）ソ連においてある人物が粛清されるのに、何か特別な理由が必要ではなかったのである。友人との会話においてふと共産党あるいは社会主義に対して漏らした不満の一言、「怪しい」と思われる人物とあいさつを交わしたことなど、人が急にいなくなるのにはわずかなきっかけだけでも十分であった。それゆえ、ソ連に生きながら自分の仕事をやり続けたいと思っている人は、創作活動において常に「いつ粛清されてもおかしくない→粛清されないように気をつけなければいけない→いたるところにおいてそれに相応しく振舞う」という類の図式を頭の中に入れていたと思われる。

従って、東洋学に関しても、その分野で長期的に業績をあげることは、イデオロギー的な要件をも常に満たすことを意味していたと言えよう。例えば、後述のオフチンニコフの場合、ベストセラーとなった『一枝の桜』の出版からソ連国家賞を取るまでには 15 年もの歳月を要した。彼がやっとそれを受賞したのはペレストロイカの 1986 年である。

さらに、後述のツヴェトフの例を見るのも面白い。後ほど彼の著した著作の特徴を考察するが、ここではウズベキスタンの科学アカデミーメンバーへの聞き取りで手に入れた情

報を記したい。彼にツヴェトフの名前を告げたところ、彼は次のように語った（interview 2011.8.16）。

ツヴェトフが司会していた『国際パノラマ』というテレビ番組を、サンクト・ペテルブルク大学の大学院生であった1984年の時によく見ていた。寮のとなりの部屋には日本語を専攻にしていた学生たちが住んでいたが、いつも彼らと一緒に見ていたよ。ツヴェトフは日本の社会をすごく批判していた。例えば、冷えた缶コーヒーを開けたら、その中身がすぐに暖くなるような発明のことを、彼は誰も使ってみようとさえ思わない資本主義的な国家の無駄遣いの産物というふうに描写した。あるいは、日本の高速道路を画面に出して、そんな膨大なお金を使って、どうするんだろう！とも言っていた。しかし、一見批判的な立場を取っているように見えるツヴェトフは、本当はそのような日本社会の革新的なところを宣伝していたに違いない。彼は工作上批判的な立場でなければいけなかったのである。

また、ツヴェトフはその番組においてよくいわゆる「北方領土」の話題をとりあげていた。例えば、日本人に『それらの島についてどう思いますか?』という質問をし、彼らが日本語で「返還してほしい!』と言っている音声をそのまま残しておいて、ロシア語に『なんとも思わない』というふうに訳していた。一般のソ連の人がそのような映像を見たら、日本人はそれらの島々のことをなんとも思わないと解釈していたかもしれないが、同じ寮の学生たちがちゃんと日本人の本当に言っていることを説明してくれた。つまり、知っている人はツヴェトフがイデオロギー的な表のカバーの下に隠していたメッセージを読み取ることができたのである。

以上から、ソ連で東洋学者であることは、西洋学界とはまったく異なる条件を満たすことを要求されるということが、容易に窺える。

2 幕末期～明治時代のロシアにおける日本観

ソ連時代の日本論を考察する前には、やはり歴史を遡る必要がある。ここで、幕末期～明治時代のロシアの日本論を考察しよう。そうすることで、ソ連以前のロシアにおける日本論の特徴が明確になり、ロシア人が隣国の日本に関して抱いていたイメージ、すなわち、のちのソ連において日本論の文献を著した研究者たちの背景知識として存在していたイメージの輪郭が見えてくるであろう。

ロシアと日本は隣国同士であることから、歴史的にお互いの国に対する関心が高かった。ソ連以前のロシアにおいて、日本論の文献に出てくる日本社会の描写の仕方の主な特徴を見ておこう。

結論から述べると、それは当時のヨーロッパとほとんど変わらない、エキゾチックな国としての日本への眼差しが主流であったことが断言できる。以下、主に木村（1984）に基

づいて、ボルシェヴィキ革命の前の日本論の特徴を考察する。

2-1 ロシアと日本の交流史

ロシアと日本の交流史に関しては、いくつかの視点があるが、その始まりは17世紀末のロシア人コサック隊長とデンベイという名前が与えられた日本人との出会いである。デンベイは後ほどペテルブルグの航海・数学学校においてロシア語を教えることになるが、その後はロシア人と日本人の出会いは一層活発になる。1710年にサニマと呼ばれた日本人がカムチャツカに漂着し、1792年にラクスマン中尉、1804年にレザーノフ使節の船がそれぞれ根室と長崎に到着した。

その後、レザーノフによって派遣された海軍大尉の N. A. Hvosťov と海軍少尉の G. I. Davydov が、日本領土上の村落に攻撃をしかけた。そのため、日露関係が悪化し、海軍少尉の V. Golovnin（以下、ゴロヴニン）は1811年にクナシリ島に上陸した時、逮捕された。彼は2年2カ月にわたって日本で抑留生活を送ることになるが、その際著わされた『日本幽囚記』は当時のロシアで圧倒的な人気を誇り、多くの言語に翻訳された。その著作はちょうど今から200年前に書かれた、初めてのロシア語での日本論だと言えよう。

2-2 ロシア人による初期の日本論

以下、著者（出版年）という形式に従って、ロシアおよびソ連における日本論の著作での日本人・日本社会のイメージの変容に関して論じる。まずは初期の日本論、ソ連以前の4人の著作を見ておこう。

(1) Golovnin (1816)

Dryzhakova (1995) によると、ゴロヴニンの著作が著される以前にロシアで一般的だった鎖国の日本社会のイメージは、かなり否定的でステレオタイプに基づいたものが多かったのである。しかし、ゴロヴニンは従来のステレオタイプに囚われないように努めており、文明化された国として日本のイメージを描いている。例えば、宣教師が日本であり積極的に受け入れられていなかった原因について、彼は日本社会の鎖国性を指摘するのではなく、宣教師たち自らの態度や彼らの日本への旅の記録の一方性に求めている。そのような好意的なイメージは読者の間でも大変人気を集め、ロシアにおける新しい日本国のイメージが構築されていった。

(2) Goncharov (1858)

ゴロヴニンの後に日本論を著わしたのは、当時のロシアで『オプロモフ』という小説で知られる、著名な作家の I. Goncharov（以下、ゴンチャロフ）である。彼は1852年に長

崎に来航した。ゴンチャロフが残した『日本渡航期』は、典型的なオリエンタリズムの著作だと断言できる。彼は、サムライの文化を称賛し、中国人と比較して日本人の活発的な性格を描き、当時のロシア人から見て、日常生活のさまざまな「奇妙な」ところを指摘している。（婦人の「見苦しさ」や服装の奇妙さなどが例としてあげられる。）

(3) Mechnikov (1878)

L. Mechnikov（以下、メーチニコフ）は、バクーニン派のアナキストであったと同時に、すぐれた地理学者、民俗学者でもあった。渡辺雅司（1978）は彼の著作、『明治維新論』と『日本帝国』における日本文化観の特徴に関して次のように記述する。

渡辺によれば、メーチニコフはまず、日本を独特な国として位置づけようとしている。日本は東洋にあって東洋ではないという特徴を持つ国で、日本を眺める時に、他のアジアの国をとおして見るのではなく、独立した国として見るべきである。さらに、欧米人は、日本への内在的な理解が欠けている点がメーチニコフによって指摘される（渡辺 1978: 64）。その欠点を乗り越えるために、彼は膨大な数の歴史書や地理書を精読し、一般市民の生活にまでも目を向けたのである。その結果、彼はヨーロッパではなかなか見られない日本人の社会的平等観念を見出した。そして、日本人の民族性は、彼の独自文明史観⁽²⁾の3段階目、海洋的風土に由来すると解釈する。

メーチニコフの考察では、日本人は単一民族ではなく、多くの民族からなる雑種民族である。この点は、20世紀の日本人論でもいろいろと議論され、多くの日本人論の研究者が近年主張するようになった論点とも重なるところが興味深い。もう一つ、それは後述のオフチニコフと重なる点であるが、メーチニコフは日本とイギリスをアナロジーで捉えていく。すなわち、島国であるその二つの国は、その独特な地理的な位置のゆえに国民性や風習などにおいて共通点が多々存在することへの指摘である。

(4) de Volla (1906)

しかし、この時期の著作の大きな特徴として、やはりエキゾチックな国としての日本のイメージ、あるいは「あべこべ」の国としての日本のイメージが主流であった。その点を確認するため、例えば、デ・ヴォランの『日出る国にて』（1906）にある日本人の「おかしい」ところへの指摘を見よう。

デ・ヴォランは当時の日本でのロシア領事で、日本国内のさまざまなところに行って、旅行記という形でストーリーを展開している。著作のはじめのところで日本の地理的・歴

⁽²⁾ メーチニコフは自然環境と民族性の直接的な関係を主張し、前者が社会環境を媒介に、後者あるいは文明の型を規定すると論じた。「彼は文明史の発展を、河川文明→内海文明→海洋文明の三段階に分け、各段階における人間の《連合》と自由を進歩の指標とする（渡辺 1978: 60）。

史的な特徴について説明した後、彼は日本で暮らす中で経験したことを述べている。その中では次のような記述が目を引く。

女性は民族衣装を着て、昔ながらの習慣を守っている。村では遠慮なく皆の前で子どもに乳をあげ、仕事をする時も胸が見えたままで働く (de Vollan 1906: 121)

ヨーロッパ的に考えれば、ここはすべてあべこべである。本は最後のページから始まり、デザートもワインも昼食の前に来て (de Vollan 1906: 122)

日本人は熱いお風呂に入ってから町に出て、真っ赤のまま裸で風邪なんかを恐れずに走っている姿を見たことがある (de Vollan 1906: 123)

その他にも、ところどころみられる、日本人の礼儀正しさや食堂で皆で食事をとる時の野蛮人に近い態度などへの指摘が印象的である。

以上のように、ロシア帝国における日本論の主な特徴として、当時のヨーロッパとかなり似ている、オリエンタリズム的な見方が主流であったことを見てきた。ゴロザニンやメーチニコフのように、日本を独自の文化が発達した国として見る者もいたが、彼らの著作はルールを裏付けるための例外として位置づけられよう。

3 ソ連期の日本論の変容

3-1 第二次世界対戦前の日本論

次に、ソ連における日本論を、代表的な9人の著者たちの文献を例に論じていきたい。まずは戦前のソ連の日本論に焦点を当てる。

後述の3人の研究者は、それぞれ言語学者、文学者、民俗学者であった。まず彼ら3人の日本論を木村(1984)に基づいて簡単に紹介したい。それらの3人の学者ともロシア帝国で生まれたが、活躍していたのはむしろソ連期である。

(5) Eliseev (1920年代⁽³⁾)

S. Eliseev (以下、エリセーエフ) は、前述したように、ソ連を亡命したあとにフランスやアメリカで言語学者として活躍していた。東京帝国大学を卒業した最初のロシア人学生であったエリセーエフの日本観は、温かくて鋭い視点に満ちている。

⁽³⁾ エリセーエフやコンラドやネフスキーも積極的に東洋学者として活躍しはじめたのは1920年代なので、ここでは木村(1984)に基づいて彼らの初期の日本観を参照する。

彼は日本人の桜に対する温かい気持ちを指摘するものの、日本の国花はむしろ菊の花であると記す。また、言語学者の彼はロシア語と日本語における子供ことばの使い方を指摘し、ロシア人と日本人の客のもてなし方に関しても分析する。エリセーエフの日本に関する記述にはイデオロギー的な要素がさほど見られないようである。

実を言うと、アメリカにおけるジャパノロジーの基礎はロシア生まれの学者によって築かれたという視点もある。「近代ロシアはもとより、フランス、米国における“日本学の父”ともいべきセルゲイ・エリセーエフ」(木村 1984: 106) に関して、あのエドウィン・O・ライシャワー(元駐日大使)は次のように述べている。「エリセーエフは西欧が生んだ最初の本職のジャパノロジストであり、アメリカにおける東洋研究の始祖である」(木村 1984: 115)。ボルシェヴィキの革命後フランスに亡命し、ソルボンヌ大学の高等研究院の正教授に任命され、後ほどアメリカに移り、ハーバード大学で東洋語学部を開設し、自ら学部長になったエリセーエフがどれほど「真の」ロシア人研究者であったかという点に関してはおそらく議論の余地が残るものの、ロシア人がこのようにヨーロッパとアメリカにおける日本学の発展に貢献したことは確かである。また、エリセーエフの熱心な研究者としての志はソ連の日本学者にも受け継がれている。

(6) Konrad (1920 年代)

N. Konrad(以下、コンラド)は、エリセーエフと異なって、ソ連における日本学の父となったと言えよう。彼は日本、日本文学、日本史に関して多くの著作を残し、ソ連における日本学の基礎を構築した人物である。

コンラドの日本観は多くのところで、後述のオフチニコフと類似点があると指摘できる。例えば、日本人の美意識を高く評価するところや禅の心に関する記述はそうである。そして、日本人が発達させた高い産業技術もコンラドの眼をとらえた。また、コンラドは特有の世界史観と世界文化観を構築した学者であり、世界史の中における中国および日本の文化の位置づけを試みていた。その中で彼は日本文化を世界文化から切り離された特殊なものではなく、むしろ「洋の東西にわたる普遍性をふまえた上で個性を打ち出している尊重すべき存在」として見ていた。これは文化の普遍性と文化の特殊性に関する彼の見方でもある。

(7) Nevskiy (1920 年代)

N. Nevskiy(以下、ネフスキー)は日本で14年ものあいだ生活し、民俗学者の折口信夫に「日本人の細かい感情の隅まで知った異人」と称されたという(木村 1984: 146)。彼の多岐にわたる研究関心は日本滞在中にさらに広げられ、ネフスキーは東北地方のオシラ様の研究をし、宮古諸島を訪れそちらの民族文化の特徴も考察した。また、彼のメトリと

オドリの類似性の指摘や、自らの愛する人の奴隷となることを望む女性の気持ちについての指摘、そして日本人の月に関するある種の崇拝の気持ちに関する分析も印象的である。

木村が指摘するように、上記の3人は大きな問題もなく日本への留学ができたものの、ロシア革命後状況が一変した。「ソ連側が学者、留学生の亡命を極度に警戒するのと“腐ったブルジョア・イデオロギー”による思想的な“汚染”」（木村 1984: 144）をきらっていたのである。ソ連において学者、そして文学作品を創造する者として生き残るためには、常にイデオロギー的な要素のことを忘れてはいけなかったのである。

（特に戦前の）ソ連において（日本の）研究者であり続けることは本当に命に関わる場所が多かった。それは例えば、レニングラード東洋学院職員 90 人のうち、スターリンが共産党の書記長であった時期に 40 人が粛清されたという事実によっても裏付けられる。

(8) Pilnyak (1927)

B. Pilnyak（以下、ピリニャック）は、上記の3人と異なって日本学の専門家ではなく、ソ連の著明な作家である。彼の日本論の特徴を確認しておこう。

ピリニャックは、『日本太陽の根』（1927）、『石と根』（1935）において、物質に頼り過ぎないという、他の国民とは異なる日本人の特徴を描いている。また、ピリニャックの著作には、彼以前から続く、日本人の「エキゾチック」なところに関する考察の跡が見られる。例えば、20 世紀の初頭に書かれたデ・ヴォランの日本論と同様に、日本社会のしきたりはヨーロッパのそれとあべこべであると彼は記述する（Pilnyak 1927: 28）。

同時に、ピリニャックの記述にはイデオロギー的な立場に基づいた指摘もある。具体的には、例えば彼は吉原に行った時、そこがヨーロッパの国に比べれば、よほど売春に関する抵抗感が低いと指摘する。また、日本人の肉体的・性的関係も批判的になる。そのような批判がなぜイデオロギーに基づいているかという点、ソ連、特に戦後のソ連ではセックスや性的関係に関する話をするのが望ましくなかったからである。1986 年の某テレビ番組である女性が「ソ連にはセックスがない」と言ったことも有名である。

そして、日本の警察制度もピリニャックによって批判されるが、全体としては彼の著作においてイデオロギー的な要素はさほど濃くないと評価できる。

3-2 第二次世界大戦後の日本論

次に、第二次世界大戦後の日本論の特徴に関して、5 人の著者が著した文献を元に考察を行う。

(9) Erenburg (1960)

スターリン後のソ連を描いた中編小説『雪どけ』で知られる作家 I. Erenburg（以下、

エレンブルグ)の日本での滞在期間は、3週間しかなかったけれども、彼は大変すぐれた日本論の著作を世に出した。日本社会に関する彼の指摘の多くが、現在でもその新鮮味を失ってはいない。例えば、彼は従来の文学者たちによる一方的な(批判的なもしくは賞賛的な)視点という欠点を指摘し、さまざまな要素を考慮に入れた立場の必要性を論じる。彼は後述のフェドレンコと同様、アメリカニゼーションによる日本社会の歪みへの指摘をするが、例えばアメリカ風のデパートが日本の街にたくさんあるという記述を、「しかしその品揃いは一般的なアメリカ人を困惑させるものも山ほどある」という追加文で補う(Erenburg 1960:65)。

そして、エレンブルグの日本社会に関する記述はまた大変好意的な気持ちであふれているのも事実である。と同時に、彼は日本人を無条件に褒めてはいない。日本は礼儀正しい民族だが、その点に関しては私生活と街頭とはまた大きな違いが見られる。あるいは、日本人はしばしば、何でも他の国から(漢字や多くの伝統文化・芸術などは中国から、国家のさまざまな制度や最新技術をヨーロッパの国々から)取り入れて、模倣したという指摘が欧米の学者からされるが、エレンブルグはそのようなことより日本人はいかにその取り入れられた文化を高いレベルにまで発達させたのかという点に焦点を当てたほうが良いと論じる。

エレンブルグの日本論は1960年に出版されたもので、同じ文献にギリシャとインドの旅行日記も入っている。全体的に言えば、彼の記述にはイデオロギー的な基盤に基づいた資本主義国家としての日本への批判はほとんど見られない。それがあっても、その後前述のように異なる立場からの記述も加えられる。

(10) Fedorenko (1966)

有名な作家、N. Fedorenko (以下、フェドレンコ)の日本論は、ブレジネフが書記長であった時に書かれたもので、その中には体制論的な視点、つまり、文化を生産様式・下部構造に還元して普遍的枠組で把握する文化観が支配的である。

彼は、1966年の『日本雑記』において、「はじめに」から日本社会の体制的ひずみや資本主義国家としての日本への批判を全面的に展開する。具体的な引用部分は以下のとおりである。

米国の外交戦略を考える人たちは、日本の保守政治家と同盟を結び、彼らの協力を得て、アジアにおける反共の防波堤を作り、そのなかで日本にある種の政治的あるいは軍事的な役割を担わせようと試みた。“New York Times”紙は1949年に既に次のように主張していた:「われわれは、日本をソ連と闘う時の基地や味方として認識している。日本の復活が早ければ早いほど、役立つ範囲も大きくなる。そのために、日本の復活に努めているのである。」(Fedorenko 1966: 5)

しかし、一見平和に見える表層の裏には、多くの不確実性や矛盾・絶望が隠されている。日本社会には根深い不安が潜んでいる。一般の人は、いつか新しい革命の時代が来て、偉大な労働者たちがたちあがり、残虐な抑圧と資本主義的な奴隷制度を永遠に打倒するはずだと強く信じている。(Fedorenko 1966: 7)

上記の二つの引用から分かるように、フェドレンコの文献における日本文化の捉え方では、東西の冷戦構造のなかで、ソ連の社会主義体制に敵対的な位置にある日本社会の現状への批判と、革命勢力の台頭についての描写が、日本理解のキー・ポイントになっている。

さらに、フェドレンコはその作品の前半において特殊なインテリ的な雰囲気を作り出そうと試みるが、筆者から見るとそれは逆効果に終わってしまうのである。彼の著作には例えば来日中に某大学の有名な先生と大晦日の日に話をしたというエピソードがあるが、その話はだんだん話し手同士の表現力や知恵を競う「大会」になってしまっていて、半分何の話をしているのか理解できない状態になっている。それはむしろ特別な教養のない一般の読者たちを遠ざけることになったであろう。

(11) Ovchinnikov (1971)

V. Ovchinnikov (以下、オフチニコフ) のベストセラー、1971年に出版された『一枝の桜』のサブタイトル「日本人とは何か」からも分かるように、オフチニコフの執筆に当たる目的は日本人の「本当の顔」を表示することであった。『一枝の桜』は、日本では1971、2009年に翻訳され現在も文庫本で入手できる。日本での発行部数は100万部にも及び、外国語で書かれた日本論の著作のなかではもっとも読みつがれているものの一つである。そして、それはソ連の日本論の頂点だとも言える著作であると主張したい。その理由を以下で説明する。

オフチニコフはソ連国民の間で圧倒的な人気を誇っていた。その一方で、ソ連の日本研究者からは批判的な意見もあった(「日本文化を過度に理想化」、「従来の日本論の文献に頼りすぎ」など)。

しかし文化論、あるいは「異文化を書く」視点として重要なのは、当時のソ連社会において、オフチニコフのパースペクティブによって表象された日本像が圧倒的に支持され流通したという事実であり、そのパースペクティブのもつ可能性である。

オフチニコフの日本論が支持された理由の一つは、そのパースペクティブの柔軟性だと思われる。『一枝の桜』が出版されるまで支配的だった日本に対する「黄禍論」的、あるいは「異国情緒的」なステレオタイプに基づいた固定的理解枠組を超えた点が多く読者を惹きつけたのである。

オフチニコフの日本観には、まず文化相対主義的傾向が色濃く含まれている。オフチニコフは1986年に行われた日本論の系譜や問題点に関する国際円卓会議に招聘され、自らの「異文化を書く」立場について論ずる機会を与えられたが、その時彼は、文化相対主義的立場を鮮明に表明する。文化相対主義という用語自体は用いないが、他国について書く時、自分の文化の「物差し」を当てはめる習慣を克服しなければならないと主張したのである。そして、作家 R. キプリングの名句、「東洋は東洋、西洋は西洋であり、二つは決して交わらない」に対して、オフチニコフは「東洋なしには西洋はなく、西洋なしには東洋はない」と断言する。ソ連（＝ロシア）の日本学の第一人者が「文化の多様性の承認＝相対主義の尊重」の立場を取っていることが指摘できる。

オフチニコフの日本観には、日本特殊論（エキゾテックでロマンティック）的な要素もあると指摘できる。『一枝の桜』には、それらの要素は以下のような形で表現されており、オフチニコフは、日本人の美の崇拝をすこぶる高く評価する。

美の崇拝は日本人の国民的宗教だといっても、言い過ぎではないだろう。それは、ほかでもない。美学的基準が多くの場合、日本人の生活哲学を規定しているからである。（Ovchinnikov 1971: 58）

さらに、彼は日本人の美の尺度になっている概念は、四つあると指摘し、それらを「さび」、「わび」、「しぶみ」、「幽玄」と分類して、それぞれの概念の詳細な説明を行う（Ovchinnikov 1971: 78-86）。また、日本文化において「善」と「悪」の概念が果たす大きな役割にも触れる。

人間には互いに敵対し合う力として霊と肉があり、前者は善を、後者は悪を体現するという、西洋に根をおろした考え方とはどうしても一致しない（Ovchinnikov 1971: 142）

しかしながら、オフチニコフの日本観は、体制論的文化理解の要素も取り込んでおり、『一枝の桜』においてそれらが表現されている。まずは、階級闘争に関する記述が目に入る。

この国のプロレタリアートは、その戦闘的精神をもって鳴り響き、資本の重圧に対抗して統一ストライキ戦線を張ってきた（Ovchinnikov 1971: 37）

また、富士山麓の米基地に対する反対デモに参加する人たちが次のように描写される。

「フジをベトナム戦争の特殊訓練場にするな」というプラカードを掲げて米軍の射撃場にはいり

込んだ付近の土地所有者たちは、やはりフジそのものと同じく、日本の国民感情の象徴となるであろう。(Ovchinnikov 1971: 269)

オフチニコフの異文化パースペクティブの特性は、その異種混交的な性質にある。いくつかの異なる文化をとらえるパースペクティブを混在させていることによって、異文化を単一の視点で切り取り平板に理解することを回避することができる。そして、そこで複数のパースペクティブを接合することで、表象される異文化像が揺らぎ変容していくダイナミズムをとらえることも可能になる。また、筆者の考えでは、オフチニコフがこのような異種混合的な文化観を作り上げたのは、それは彼なりのイデオロギー的な要請への対応であったからだと思像される。

(12) Latyshev (1976)

I. Latyshev (以下、ラトゥイシェフ) は前述のオフチニコフの「プラウダ」紙特派員としての先輩で、1976 年に『われわれの時代の日本 (ジャーナリストの手記)』という著作を出している。

1974～1975 年は日本の経済、政治界、そして社会にさまざまな不祥事やトラブルが起きていたことは、周知のとおりである。それゆえ、その時代の日本に関して著された文献には、日本が直面しているさまざまな課題への指摘があってもまったくおかしくない。しかしながら、そのような課題にばかり焦点を当て、日本社会のポジティブなところ、ソ連の政治家たちや国民も見習うべきところをほぼ無視するのも客観的な立場ではないと思われる。ラトゥイシェフのその著作はまるで当時の欧米の日本人論と正反対の立場にあるように見える。ヨーロッパやアメリカの学者・ジャーナリストたちは当時の日本を賛美ばかりしていたのに対して、彼は日本社会の抱える問題ばかりに集中している。環境破壊や住宅問題、教育における課題、女性の社会的な不平等の問題などがその具体例である。

唯一日本社会のすぐれたところは、ソ連との交流が深まっていること、あるいは「われわれが生きる時代の偉大な主義であるマルクス主義やレーニン主義は、日に日に数多くの日本人の労働者たちの世界観になりつつある」(Latyshev 1976: 145) というところである。

後輩のオフチニコフの著作には、イデオロギー的な「におい」がそれほど濃くなかったのに対して、ラトゥイシェフの記者としての記事は当時のソ連におけるジャーナリズムの典型例であろう。

(13) Tsvetov (1986)

V. Tsvetov (以下、ツヴェトフ) の著作、『竜安寺石庭の 15 番目の石』が出版されたのはペレストロイカが開始された 1986 年だが、著されたのは 1983～1984 年の間である。ツ

ヴェトフは自らの著作において主に日本型マネジメントに焦点を当て、さまざまな例をあげながらすこぶる興味深い議論を展開している。イデオロギーの強弱の境界線の時期に書かれたこの著作は、イデオロギー的な基盤に基づいた指摘は前述のオフチニコフと同程度のものである。

ツヴェトフは日本人の礼儀正しさに関して、(9)のエレンブルグの指摘と重なる記述を行う。つまり、日本人は知っている人と交流する時には大変礼儀正しさを重視するが、家の外に出たらロシア人がおかしいと思うほど無礼に振る舞うようになると彼は指摘する。また、教育制度のさまざまな課題に焦点が当てられる点は本著の大きな特徴である。

全体的にいうと、ツヴェトフの著書は1-2-2で述べた彼の司会していたテレビ番組のスタイルとかなり似ている。彼は日本社会のさまざまな側面に関して分析を行う際、まず資本主義国家としての日本を見ようとしている。その視点は(12)でふれたラトウイシェフほどイデオロギーの色が濃くないにしても、まず欠点を見出そうとする視点である。しかし、それはおそらく必要不可欠な立場であったと筆者は推測する。なぜかという、ツヴェトフのこの著作からは日本に対する大変好意的な立場が窺えるからである。

4 考察

以下、ロシアおよびソ連の日本論の特徴に関して、4つの観点から考察を行う。つまり、「ソ連の日本論で誕生した文化解釈への新しいアプローチ」、「ソ連の日本論の多様性」、「ソ連の日本論の共通性」、および「日本を夢見るロシア人たち」である。

4-1 ソ連の日本論の多様性

日本論の分野で活躍していたソ連の研究者たちの、ソ連社会のイデオロギー的な要素に対する対応を分析することは大変興味深い。本稿でとりあげた9人のソ連の研究者の間では、少なくとも三つの「対応のパターン」が分類できる。すなわち、イデオロギー的な要素をできるだけ多く日本論の著作へと入れ込むパターン(フェドレンコ、ラトウイシェフ)、イデオロギー的な要素を必要な程度だけ、最小限に取り入れるパターン(オフチニコフ)、イデオロギー的な要素を十分に取り入れるが、表面的に色濃いイデオロギーを含む文章の裏に読者にもう一つのメッセージを送りこむパターン(エレンブルグ、ツヴェトフ)である。

本稿では、9人の日本論の筆者しかとりあげられなかったが、おそらく上記のようなイデオロギー的な要素をどれほど著作に取り入れるのかということに対する三つの立場は、それ以外のソ連の日本論、さらに言えば、文化、芸術などにも応用できるのではないかと

思われる。しかし、日本論の多様性は、イデオロギーに限定された話ではない。それは例えば、それぞれの著者が焦点を当てようとしていた点にも求められる。

具体的に言えば、日本社会はいかなるものとして記述され、その特徴を説明するための原因はいかなるものに帰結されていたのかという点にも、ソ連における日本論の多様性を見ることができる。例えば、オフチニコフは日本社会のさまざまな現象の原因を日本人の国民性の深層における倫理的・美的カテゴリーに求めていたのに対して、エレンブルグは日本人の状況適応能力を大変高く評価していた。さらに、フェドレンコやラトウイシェフのように、日本社会の問題は資本主義国家としての日本の存在に起因すると指摘する者もいれば、日本を自分の世界史・世界文化観（コンラド）、もしくは自然文明史観（メーチニコフ）という網羅的な理論の枠組みに位置づけようと試みた者もいた。

4-2 ソ連の日本論の共通性

前項では、ソ連の日本論における多様性は、イデオロギー的な要素と日本社会のさまざまな現象の元にある原因への説明の形で現れるのを見てきたが、ここでは共通性に関して簡単な考察を行う。

ソ連の日本論は、バラエティに富んだ考察を行ってきたことは今までの分析から容易に窺える。しかしながら、そのバラエティにこそソ連の日本研究を貫くある種の共通性、もしくは基本的なスタンスのようなものを見出すことができる。それは、少なくとも次の三つの点にまとめられる。

つまり、第一に、ソ連（ボルシェヴィキ革命の前のロシアに関しても同様なことが言えるが）の地理的な位置が大きく関与することである。ソ連は、ヨーロッパでもアジアでもないと同時に、ヨーロッパでもアジアでもあるような国であるがゆえに、明らかにアジアの国である日本に対する見方は、論者のソ連の位置づけによって異なる場合が考えられる。本稿で考察の対象としてきたのは、主にソ連をヨーロッパの一部だと考えている著者たちの日本論の文献なのだが、ソ連のことをアジアの一部だと考えている日本論はひょっとしたらそれらの記述と異なる点を多く含むのではないかと考えられる。それは今後ソ連の日本論に関して論じる時、考慮すべき点であるに違いない。

第二に、前述のイデオロギー的な要素に関する立場は、多様性の象徴であると同時に共通性の印でもあると断言できる。なぜかという、ソ連時代の日本論の文献のすべてに、その強弱に差異があったにもかかわらず、イデオロギー的な要素が含まれていたからである。ただし、ここで注意してほしいのは、そのイデオロギー的な基盤を否定的なものとして捉える立場の一方性である。それはむしろ、オフチニコフの『一枝の桜』をとおして

現れたような、積極的で新しい文化の解釈へのアプローチを生んだことに繋がった。

第三に、その経緯や原因に対して次の項で詳しく考察するが、ソ連の日本論を著した人たちは基本的に日本人に対して好意的なイメージを生成することが多かったことである。それは共産主義のイデオロギー的な背景とも関わる点だが、ロシア人の歴史学・政治学・日本学研究者である V. モロジャコフがそれに対して次のように言及する。

しかし、その時でもソビエト側のプロパガンダは、戦争中のアメリカ・イギリス側のプロパガンダと基本的に違って、民族としての日本人を侮辱しなかった。アメリカなどから見れば、日本人は戦争の敵だけでなく、基本的に悪い民族、二流の人々であった。ソ連のプロパガンダ政策では、そこが違っていた。日本の帝国主義者と軍国主義者、資本家と地主が我らソ連人の敵だが、日本の労働者と農民は我らの兄弟だ、とソ連共産党は宣伝していた。また日本の軍国主義・資本主義と戦うことで、我らソ連人は日本人の労働者と農民を助けるのだ、と言われていた。その結果、ソ連時代でもロシア人は、民族としての日本人に対する敵意というものをまったく感じなかった。(モロジャコフ 2011: 33)

そのような背景があったからこそ、ソ連の日本論の著作からも日本の労働者たちに対するある種の好意的なまなざしが窺える。その裏にあるのは、どのような事柄なのだろうか。その点を次項で考察していきたい。

4-3 ソ連の日本論で誕生した独自のアプローチ

前項において、ソ連の日本論の多様性および共通性に関して考察を行ったが、ここではそれらの2点を超えた独自の文化解釈のアプローチを紹介する。

「異文化を書く」行為において「書く側」にある種のイデオロギー的な要素が存在していることは今まで否定的な現象として捉えられがちであったが、ソ連の日本論においてそれは日本論のベストセラー、オフチニコフの『一枝の桜』の作成へとつながったのである。また、そこでは従来の欧米の日本論と異なる、いくつかのパースペクティブが接合する、異種混合的な文化観に基づいた著作が著されたことが大変興味深い。本稿でオフチニコフの日本文化観を考察することで、「異文化を書く」という営みにおいて、柔軟性、複数性、流動性という要素が、いかに重要であるかということについても気づかされる。

オフチニコフが『一枝の桜』を著した以前には、西洋では少なくとも次の四つの異文化理解における基本的なパースペクティブが考えられる。それは、前述の「オリエンタリズム」(自分と違う「東洋」を不気味な、あるいはロマンチックな他者として規定する西洋の眼差し)、「文化相対主義」(すべての文化に優劣は存在せず、相対的に自律しているという視点)、「文化普遍主義」(すべての文化に共通する普遍的な価値・構造を措定でき

るという視点)、「体制論的な視点」(マルクス主義的な考え方に基づいて文化を超越した普遍的枠組の一種として異文化をとらえる視点)である。オフチニコフの日本論の一番大きな特徴は、それらのパースペクティブとまた異なるアプローチが生まれた点にまとめられる。

そもそもオフチニコフは、意図的に自分の日本論にいくつかのアプローチを混合させたとは考えにくい。むしろ、プロの日本学研究者ではなかった彼の著作には、自然とその新しいアプローチを構成する要素が組み合わせられたと想像される。そして、それを可能にしたのは、当時のソビエト連邦という、イデオロギー的な「眼鏡」をとおして他国を見ることが求められていたすこぶる特徴的な国の存在ではないかと筆者は推測する。

4-4 日本を夢見るロシア人たち

ロシア人およびソ連人の日本論の大きな特徴として、日本をロマンチックな目で見たり、あるいはある種のユートピアとしてみなしたりしていた時期があったことがあげられる。それは、ゴロヴニンの積極的な日本人の習慣等に関する描写で始まって、4-2 でふれたモロジャコフも指摘するように、19世紀の終わりごろの、ロシア人の美術家たちがヨーロッパ経由で日本の浮世絵などを知った時の憧れの風勢、いわゆる「ジャポニズム」に続き、スターリン期の日本人労働者に対する共感の気持ち、そしてスターリンの後のソ連の第二のジャポニズム、「日本型経営」や「日本の技術の高さ」に象徴されるような流れで終わった。さらに、ソ連の崩壊後のロシアには、日本のポピュラーカルチャー(アニメやマンガなど)がブームになりつつあると同時に、伝統的な文化(茶道や武道や着物の着付けなど)も高い人気を誇っている。

研究者によっては、日本および日本人をソ連人のトップの政治家・経営者たちが、ある種のユートピア、もしくはソ連にとってとても良い国の例として捉えていたと解釈する者もいる。例えば、A. Mechtcheriakov は自らの論考において、ソ連においてわりと積極的にポジティブな日本社会のイメージが生成されていた原因として、1960年代のソ連の政治家たちは「どこか心の奥に日本のことを愛していた」と記す。(Mechtcheriakov 2000: 29) それは、共産主義のレジーム下で実現できなかったことが、腐敗してしまった西洋の資本主義諸国と異なる日本において実現できたからである。したがって著者たちも、イデオロギー的な要素を著作に入れるように求められていたと同時に、中国、西洋あるいはアメリカよりもポジティブに日本社会を描写することが許可されていた。

さらに、Kimura, Hiroshi (2000)によれば、ペレストロイカ期のソ連において日本は三つのことでソ連社会のこれからの発展へ貢献できると考えられていた。すなわち、ソ連

の知識人の多くは、ソ連のペレストロイカを促進した国の一つ、ソ連における改革の例になりうる国の一つ、そして新しい文明を創造する国という三つの役割を日本が果たすことを期待していたのである。そのような流れへの言及があったのならば、一般の人びとも日本に対して好意的なイメージをいただいていたのは当然であろう。

4-5 1960年代以後の日本を対象にしたソ連の日本論におけるオリエンタリズム

「はじめに」で見てきたように、1960年代以前の東洋を考察の対象とした、ロシアのオリエンタリズムに関する研究は多くなされている。ここでは、それに対比できるものとして、1960年代以後のソ連における、日本を対象にした東洋観の特徴に関して考察を行う。

ロシア帝国におけるオリエンタリズムとは、西洋のオリエンタリズムと同様に、「植民地化する－植民地化される」という、ある種の権力関係として成り立っていることが断言できる。ただし、3-2で考察を行った第二次世界大戦以後のソ連におけるオリエンタリズムには、それと共通の点もあれば、異なるいくつかの性質もある。

共通点として、考察の対象としていた国をある種のユートピア、理想的な場所として眺めるというところがあげられる。本稿でとりあげた著者の中でそのようなスタンスを取っていたのは、エレンブルグやツヴェトフであるが、その点がどこよりも鮮明に表現されているのはオフチニコフの著作においてである。日本社会の歪みに批判的な矛が向けられる時でも、彼は日本の労働者たちの明るい将来を信じていて、彼らの戦いは無駄にならないと主張する。その点にソ連に住んでいた多くの一般の人々も共感できたはずである。

そのユートピアとしての日本のイメージにはしかしながら、従来のオリエンタリズムと異なる点も潜んでいる。それは、日本社会において実現できた、ソ連よりはるかに生活の水準が高い社会という視点である。そこにはある種の社会的な完成が眼差されている一方で、その説明要素の位置づけに伴う難しさも存在する。前者はもしかしたら、「成功した社会主義国家」としての日本を称賛する研究群と関連できるのかもしれない。また後者は例えば、オフチニコフのように日本人の国民性を社会の深層に存在するであろう「さび」、「わび」、「しぶみ」、「幽玄」などの要素に還元することで、国家として「成功した」日本を特殊なものにし、神秘的なニュアンスを作り出すことにつながる。

おわりに

本稿では、まず日本論の位置づけを確認し、ソ連において異文化に関して書くという行為とはいかなるものだったのか、簡単に考察した。その際、ソ連の日本論を、従来のオリ

エンタリズムに比べてもきわめて特殊なものにしていたイデオロギーの存在に触れ、先行研究に基づいてロシアのオリエンタリズムの概要を示した。その後、ロシアにおける日本論の概要や主な特徴を確認してから、ロシア帝国で活躍していた4名の論者の日本観、そしてソ連で活躍していた9名の日本観の特徴を考察してきた。その主な特徴として、ソ連以前のロシアにおいては当時の欧米で行われた日本論の研究の流れと重なるところが多かったのに対して、ソ連の日本論はまず何かの形でイデオロギー的な要素との関わりを必要とされていたことが分かった。さらに、そのイデオロギー的な要素が否定的なものとしてとらえられがちである点を再確認するとともに、オフチニコフの例を生かしながらソ連で生まれた新しい文化の解釈へのアプローチを考察した。

また、ソ連における日本論の最大の特徴を一言で説明すると、それはオリエンタリズムの枠組みから距離をおいた「非西洋的で非正典的」なところである。そこにこそソ連における日本論を詳細に考察する意義があるし、そうすることでまた従来の日本論と異なる側面、あるいはオフチニコフのように新しい接合的な文化観が生まれる可能性が潜んでいる。

ソ連における日本論を「非西洋的で非正典的な」ものとして位置づけることには、やや否定的なニュアンスが感じられるのかもしれない。しかしながら、それはむしろ従来のオリエンタリズムの権力関係（論じる側－論じられる側）とは異なるある種の権力（イデオロギー基盤の関係）の存在、論じる側にだけ存在していた特殊な「眼鏡」（「レンズ」）の存在が与えた影響を意味しているのである。ソ連に存在していた、全社会を貫くようなイデオロギー的な基盤は、ソ連の日本論を分析する時にポジティブなものとしてとらえるべきであろう。

そうすることによって、ソ連では実現できなかったある種のユートピアの社会を日本国に見出していたソ連の知識人たちや一般人の視点を視野に入れると、日本社会を完全に理解しかねるものとして捉えていた文献の主張もうなずけるであろう。すなわち、1960年代以後のソ連型日本観において、日本社会の特徴を説明できるものとして以下のような図式ができていたのではないかと推測される。

「成功した社会主義国家」としての日本社会という実体から連想されるのは、ソ連人にとってある種のユートピアとしての日本社会という物語イメージである。そして、それと似たような社会がソ連ではなぜ実現できなかったのかという問いに対して、日本が「成功した」のは、社会の深層に潜んでいる国民性に関わる特殊的な要素のおかげであるという結論がなされるのである。

それは4-4で見てきた点と重なることで、筆者の直感にすぎないのかもしれない。しか

し、ソ連の日本論において読者の間で一番人気を誇っていたのは、イデオロギー的な色が薄かった著作のほうである。なぜなら、読者たちも自らの毎日の日常生活と異なる、積極的な日本社会のイメージを求めているからである。

最後に、ソ連の日本論において、イデオロギー的な制約に対するそれぞれの著者の立場はさまざまであったが、イデオロギーの基盤の存在は、新しい接合的な文化観の誕生を導いたと改めて強調したい。

参考文献

- Академия Наук СССР Ордена трудового красного знамени Институт востоковедения, 1984, Библиография Японии. Литература, изданная в Советском Союзе с 1959 по 1973 г. (Bibliography of Japan. Literature published in the Soviet Union from 1959 to 1973 years), Наука.
- 有田亘, 2010, “オリエンタリズム E. W. サイド『オリエンタリズム』(1978),” 井上俊・伊藤公雄 編, 2009, 『社会学ベーシックス 第3巻 文化の社会学』, 世界思想社, 115-124.
- 綾部恒雄, 1992, 『外から見た日本人 日本観の構造』, 朝日選書.
- Brower D. R. and Lazzerini E. J. eds., 1997, *Russia's Orient: Imperial Borderlands and Peoples, 1700-1917* (Indiana-Michigan Series in Russian and East-European Studies), Indiana University Press.
- Clifford, J., 1988, “On Orientalism,” *The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature and Art*, Harvard University Press.
- Дрыжакова Е. (Dryzhakova, E.), 1995, Первый образ Японии в русской литературе: «Записки капитана В. Головнина» (1816) (The first image of Japan in Russian literature: “Notes of captain V. Golovnin”), (2011年9月22日取得, <http://hdl.handle.net/2115/8079>).
- Edstrom B. ed., 2000, *The Japanese and Europe. Images and Perceptions*, Japan Library (Curzon Press Ltd).
- Эренбург И. (Erenburg I.), 1960, Путевые записи. Япония, Греция, Индия (Travel diary. Japan, Greece, India), Искусство.
- Федоренко Н. (Fedorenko N.), 1966, Японские записи (Japanese notes), Советский писатель.
- Kimura, Hiroshi, 2000, “Japan as a Model for Russia,” *Japan Review*, 12: 41-74, (2011年9月22日取得, <http://shinku.nichibun.ac.jp/pub/pdf/jr/IJ1203>).
- Головнин В. (Golovnin V.), 1816, Записки флота капитана Головнина о приключениях его в плену у японцев в 1811, 1812 и 1813 гг. ч. I-III (Notes of fleet captain Golovnin about his adventures in Japanese captivity in 1811, 1812 and 1813 years, parts I-III), Морская типография.
- 木村明生, 1984, 『ロシア・ソ連人の日本観——なぜ北の隣人はわれわれの文化に敬愛の情を抱き続けるのか』, PHP 研究所.
- 古谷野敦, 2010, 『日本文化論のインチキ』, 幻冬舎.
- Латышев И. А. (Latyshev I. A.), 1976, Япония наших дней (журналистские заметки) (Japan of our days (journalist sketch book)), Наука.
- 明治大学国際日本学部, 2008, 『「ニッポン学の現在」——GENJI からクール・ジャパンへ』, 角川学芸出版.
- Mechtcheriakov, Alexandre N., 2001, “Japanese Studies in Current Russia: Inheritance and Inheritors,” *International Research Center for Japanese Studies, Japanese Studies Around The World 2000*, Kyoto: International Research Center for Japanese Studies, 27-35.
- Mikhailova, Y., “Понять Японию чрезвычайно сложно: Дмитрий

- Позднеев о Японии и русско-японских отношениях” (“To Understand Japan Is Difficult: Dmitrii Pozdneev on Japan and Russo-Japanese Relations”), *Proceedings of the Oriental Institute of DVGU*, Vol.16, 2010, 24-40.
- Mikhailova, Y. and Steele, William M. eds., 2008, *Japan and Russia: Three Centuries of Cultural Images*, Global Oriental.
- モロジャコフ・ワシーリー, 2011, 『ジャポニズムのロシア——知られざる日露文化関係史』, 藤原書店 (=第一部村野克明訳).
- Овчинников В. В. (Ovchinnikov V. V.), 1971, Ветка сакуры. Рассказ о том, что о за люди японцы (A branch of sakura: A story of what people the Japanese are). Молодая гвардия.
- Пильняк, Б. (Pilnyak B.), 1927, Корни японского солнца (The roots of Japanese sun), Прибой.
- Sahni, K., 2006, *Crucifying the Orient* (Institute for Comparative Research in Human Culture), Orchid Press.
- Said, Edward W., 1979, *Orientalism*, Vintage.
- Schimmelpenninck van der Oye, D., 2010, *Russian Orientalism: Asia in the Russian Mind from Peter the Great to the Emigration*, Yale University Press.
- 下斗米伸夫, 2011, 『図説 ソ連の歴史』, 河出書房新社.
- 新堀通也, 1984, 『知日家人名辞典』, 有信堂高文社.
- Смавзюк О. Л. ред. (Smavzyuk O. L. ed.), 1960, Библиография Японии. Литература, изданная в Советском Союзе на русском языке с 1917 по 1958 г. (Bibliography of Japan. Literature published in the Soviet Union in Russian from 1917 to 1958 years), Издательство Восточной литературы.
- , 1965, Библиография Японии. Литература, изданная в России с 1734 по 1917 г. (Bibliography of Japan. Literature published in Russia from 1734 to 1917 years), Наука.
- 寺川喜四男, 1964, 『全ヨーロッパの日本学研究とソヴィエトの日本語研究』, 日本学士会.
- Воллан Григорий-Де (Vollan Grigoriy-De), 1906, В стране восходящего солнца (In the country of the Rising sun), М. О. Вольф.
- 渡辺雅司, 1978, 「ナロードニキと日本 (2) ——メーチニコフの東洋文明観における日本の位置——」 『ロシア語やロシア文学研究』 (12) : 58-71, (2011年9月22日取得, http://ci.nii.ac.jp/els/110001256879.pdf?id=ART0001635748&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1320235951&cp=).

(サンドロヴィッチ ティムール・博士後期課程)

Japanese Studies in Russia and the Soviet Union: Focusing on Their Diversity and Commonality

Tymur SANDROVYCH

It would not be an exaggeration to state that the publication of *Orientalism* in 1979 by Edward Said entirely changed the way cultures were written and thought about. This work opened new horizons by focusing on the power relationships between the Western countries and their colonies. However, Said was also criticized for several shortcomings in his theory, one of which was the limited scale of the “West-East” paradigm that he developed. Also, the literature he concentrated on was a mere fraction of the literature written about various cultures.

“Nihonron,” the so-called discourse on Japanese society, as examined in this paper, can be placed right outside the paradigm of traditional orientalism. It was written in the Soviet Union – the country which Said did not take into consideration, and the one which had a very peculiar ideology – a communist one – in the background. Another characteristic feature of the theories on Japanese society in the Soviet Union are the facts that the two countries are not separated geographically and are actually close neighbors whose relationship has a long history. In addition, one should also take into consideration the dubious identity of the Soviet Union and Russia that preceded it – they were both Eurasian countries, with these two identities becoming stronger or weaker at different periods of time.

In this paper I focus on the main characteristics of “Nihonron” in Russia and the Soviet Union, paying special attention to its diversity and commonality, as well as the new integrated approach to interpreting the cultures, which was articulated by Vsevolod Ovchinnikov and born within this discourse. Also, I argue that, despite ideological differences, in the bottom of their hearts Soviet (Russian) people actually liked Japan, for a number of reasons. This is the point quite similar to traditional “orientalist” framework; however, what distinguishes Japanese studies in the Soviet Union, especially after 1960s, is the fact that Japanese society was often considered to be “unexplainable” and “difficult to understand”.